本だな

「気候学の歴史 ―古代から現代まで―」

吉野正敏　著
古今書院，2007年６月，
437頁，5600円（本体価格）
ISBN 978-4-7722-3102-2

手に取るとずっしりと持ち重りのする，全437ページに及ぶ大著である．先ず，本書の目次を示すと，

第Ⅰ部　気候の認識・把握・分析
第１章　気候認識・気候概念の変遷と確立
第２章　気候学発達の背景
第Ⅱ部　方法・対象別にみた気候学発達の歴史
第３章　方法別発達史
第４章　対象別発達史
第５章　人間活動・動植物と気候

となっている．

著者は「まえがき」において，この著作をまとめるに至った経緯について，以下のように述べている．

「20世紀は気候学の時代であった．…気候学ほど劇的な発展をした分野はほかにないと思われる．」，「気候学の歴史は長い．『気候とは何か』，…『人々は気候をどのようにとらえてきたか』，これを一冊の書物にまとめるのは，試みようとすること自体が無謀かもしれない．」，「…気候がかかわる分野は広い．だから，ヒト個体として，または人間社会としてどうとらえてきたか，どのようにかかわってきたかは，その活動すべてをみなければならない．これを一人の研究者ができるはずがない．しかし，私は自分のできる範囲であえてこれを試みた．これが本書である．」．

また，著者は次の様にも述べている．「さらに問題は『歴史』である．私はこの本を書く前は，“歴史とは，事実の客観的な時間的配列である”と考えていた．」，「歴史とは客観的なもの……誰が書いても次第に同じものになる……と私は考えていた．ところが，私は本書を書いてみて，歴史とはきわめて主観的なものだということがわかった．…言い換えれば本書は私が描く歴史であって，客観的に書こうとは務めたが，結果としてはきわめて主観性が強い．」，「科学史はもともと私の研究対象の一つであった．…『科学史に学ぶ』ことがいかに大切かをこの時代に体得した．…1970年代，1980年代には…研究プロジェクトを実施したが，…まず研究対象の研究史の把握，つまり文献の目録づくりから始めた．」．

気候学研究の第一人者である著者の長年に亘る研究活動に基づいて著された本書は，著者が「本書は『私の気候学』の歴史でもある．」と述べているように，吉野気候学の集大成とも言える．

本書は，19世紀末から20世紀末に至る気候学の発展を概観するのに最適の教科書であり，いずれの章も大変興味深い内容が盛り込まれている．方法別，対象別に気候学研究の発展の歴史が概観されている第３章～第５章は，この分野について具体的な研究を行うに際して，各分野がどのように発展してきたかを俯瞰するのに非常に役立つ．それは，ここに述べられている多くの分野において，著者が第一線の研究者として実際に携わってきていることから，具体的かつ詳細にそれぞれの発展の歴史が述べられているからである．

また，各章末に記載された多数の文献リストも，著者のこれまでの著作同様，非常に広範囲に亘っており，研究を進める上で有益であるとともに，評者のように，研究とは直接関係なく気候学の歴史を学ぶ者にとっても，知識の世界を拡げてゆくための確かな指標となる．

評者は本書の第１章，第２章を特に興味深く読んだ．これらの章は科学史研究を研究分野のひとつとし，多くの著作を手がけてきた著者の，科学史研究の思想や方法論がもっともはっきりと見出され，個性が最も発揮されている部分であると感じられた．

以下に，評者が本書で得た興味深い事項のいくつかを例示すると，

- 日本語の「風土」と，ヨーロッパの“climate”がほとんど同じ変化をしている．
- 日本で初めて「気候」という言葉を使った人物は渋川春海である．
- ヨーロッパの「気候」（climate）概念はclimata（緯度の変化）から出発したのに対し，中国の「気候」は「二十四番の気候」から出発した．前者は「風土または地候」と呼ばれ，後者は「時候または天候」と呼ばれた．
- 既に江戸時代において川本幸民は，人間環境としての気候の価値を指摘．
- 森　林太郎（鷗外）の刊行した「陸軍衛生教程」に気候が一つの章となって記述されている．
- モンテスキューはその著書「法の精神」の一部で気候環境論を展開．

© 2008　日本気象学会

・明治における自然環境論の発展は，人間自身に差別を与えない人間観に裏うちされている．
・日本人の精神生活の内部に自然が，宗教における救済者のような働きをしてきた．
・1970年代の前半，日本では気象学から気候学への貢献が既に極めて重要であった．
・21世紀の気候学がかかわるべき課題は，環境倫理を基礎とした「風土論」の見直しである．
・(社) 日本気象学会の成立が，地理学界における気候研究の刺激となった．
・気象学界と気候学との相互作用の歴史．

等々である．特に第2章には，評者も直接関係した多くの国際プログラムなどが，気候学の歴史的な展開の中で説明されており，非常に興味深かった．

また，コラムとして挿入されている内外の気候学者の略伝なども非常に興味深い．

本書は今後も，気候関係の調査・研究を行うに際して参考にすることが出来る最適の教科書として，その価値を保ち続けるものと思われる．

((財) 日本気象協会　藤谷徳之助)